本江邦夫の「今日は、ホンネで」第86回

洋画家

入江一子

Kazuko IRIE

シルクロードの色彩と「朝鮮」の原風景

神奈川県立近代美術館葉山の休憩室にて。この日、本江氏は女子美術大学で講義を行ってから美術館へとかけつけて対談に臨んだ。

撮影：山下 武

シルクロードに魅せられ86歳まで40年間で30か国以上を取材旅行し、独立展と女流画家協会展で毎年発表してきた入江一子さん。戦前の「朝鮮」に生まれ現在98歳。神奈川県立近代美術館葉山での「日韓近代美術家のまなざし―『朝鮮』で描く」展（5月8日まで開催）には出品作家として名を連ねる。同展開催中の美術館の一室で、朝鮮時代からシルクロードにいたるまでの入江さんの歩みに本江氏が迫る。

林武の手紙

本江 日本美術家連盟の最新の機関誌（連盟ニュース4月号）に入江さんが巻頭で特集されていました。聞き手の福島瑞穂さんが、入江さんがあのページでインタビューを受けた最初の女性の油彩画家だとコメントされていて、驚きました。女性が洋画家となることが、いかに困難だったかを物語っていると思います。その記事の中に、入江さんが師事された林武さんの私信が掲載されていました。とても胸に響く内容の手紙で、涙が出そうになりました。

入江 私が独立展に出品したときに、審査結果が出た後に送ってくださったものです。

本江 この独立展に、入江さんは3点出品されたんですね。ところが審査によって最終的に1点しか入選しなかった。なぜそうなったのか、経過と理由を林さんがドキュメンタリーのように綿綿と記している。こんな画家はほかにいない。

入江 林先生は普段こういうことをお書きにならないんです。

本江 私ももともとそうですが、日本の公的な美術館にいると「人気作家＝売り絵作家」という固定観念ができてしまっていて、学芸員はまともに考えようともしません。ところが入江さんの著作を読んで、林武という画家が芸術に真摯に向き合った実に偉い人物だったことが分かりました。この手紙なんかまさにその証拠ですよね。

入江 林先生はいつでも命がけで絵に向かわれていました。名誉のためでもなく、売るためでもなく、ただいい絵を描きたいと作品に挑みかかるように制作されていました。私たちに対しても、いい絵を描くにはどうすればいいかということだけを伝えようとしていました。

本江 手紙にもそのことがうかがえます。

［林武、幹子夫人からの手紙］

冠省　昨日は留守中においでの由、君の作品が惜しくも一点になってしまった。本年は五十何名かの大多数の会員が審査にたずさわった為、各自の主張は絶対に避けられた。凡て挙手の多数決でどんどん決まってしまった。

中には、要領よく主張する者もあり、それ故に却って数が減る場合もあり、又増す場合もある。君も二点という声もあり、僕も一寸言ったが、再決するに至らなかった。

又、運という点で、君の絵は夕方近くなり、スピードで決まった時で、又ある絵が落ちると、それに反動的に次の絵も落ちるという、だんだん厳選になって行ったなと思った程で、運が悪いといえば悪い。それに僕が非ボス的性格で公正主義の性癖があるのも損かもしれない。

来年は二点は確実と思う。あの分で勉強すれば、どんな場合でも、乗り切れると思います。まだ人の手助けや運不運では実力がない事というより他なく、一年や二年の差より一生の問題の方が、どんなに大切だかを思うと、この運命をよりよく生かして下さい。

具体的にはお出での時よく話しますが、第一審は三点（二人少女、髪すき、十二号位の少女像）が入っており、スポーツ女と僕が一点直して追加した分も共に落選、結局二人少女一点になり、若し君が中途で止めて置く手腕が判れば、君が近々良い絵が描けるようになるのです。

林　武

入江一子様

非常に私、残念と思ひましたが、全く――今後のあなたの絵を楽しみに、淋しさいくらか消されつつあります。

林幹子

（原文のママ）

韓国・大邱での暮らし

本江 この展覧会は「日韓近代美術家のまなざし―『朝鮮』で描く」というタイトルがついています。20世紀前半を中心に、つまり太平洋戦争前に当時の朝鮮半島にどのような美術が展開されたか、戦後にどうつながったか、日本と韓国の美術家がどのような作品を生み出しどのような交流を果たしたかを紹介する画期的な展覧会だと思います。作品も資料も豊富だし、カタログも日韓英の3か国語で読めて、韓国側の視点もちゃんと出ている。

入江 とっても懐かしく思いながら作品も文章も拝見しました。

本江 入江さんはこの展覧会に出品されている日本人作家で唯一の生存者ですね。

入江 韓国の作家に私と同じ年生まれの金秉騏（キム・ビョンギ、1930年代に日本留学、現在LA在住）さんがいらっしゃいますが、日本人では私だけです。

本江 入江さんは大邱（テグ）のお生まれですね。どんなところでした？

入江 海のない盆地で、リンゴの産地でした。市場があり、広場があり、日本人もたくさんいました。

本江 お住まいは日本式の家屋？

Motoe86.indd 72-73 15/05/11 16:06

入江　うちはそうでした。でも近所にあった朝鮮の家も懐かしく思い出します。

本江　毎日絵を描いていたとか。

入江　夏休みの課題は一枚でいいのに、毎日描いて何十枚も提出して驚かれたり。

本江　修学旅行にも行ってないそうですね。絵が描けなくなるからと。フランス留学のチャンスを蹴ったのはその頃のことですか？

入江　女学校の5年生の時に「鮮展」という、日本でいう昔の帝展のような展覧会に出品しました。2点出したら両方とも入選して、そのうちの1点をフランス総領事のドペール氏が「朝鮮の民家の情景が良く描けている」と買上げてくださいました。それを仲介してくださったのが、山田新一さんです。

本江　山田新一さんの作品はこの会場にもありましたね。

入江　そうです。あの方です。ドペールさんが帰国されるとき、私の家まで来て下さって、一緒にフランスに行こうと誘ってくださいました。夢のような話でしたが、母

98歳の今、描きたいと思うことが、いくらでも描けるようになってきました。

——入江

は心配して、憲兵隊に相談に行きました。すると憲兵は喜んで、費用も全部出すから行きなさいと強く薦めたんです。

本江　憲兵が費用まで出すと？

入江　それで母は怪しいと感じたんですね。

本江　スパイにされるところだった。

入江　当時スパイは絵描きに扮していたらしいですね。女ならばなおさら都合が良かったんでしょうが、怖くなってフランス行きはやめました。

松根油をつくる朝鮮のひとびと　91×117cm　1945年

日本の緑と朝鮮の大地の色

本江　今回展示されているこの絵《沼地風景》は大陸的な土っぽい感じがします。1938年ということは、日本で描かれた？

入江　女子美の卒業制作で、独立展に初入選しました。

本江　つまり大邱を思い出して描いた。

入江　はい。朝鮮の沼地を描いたものです。本当にこういう色なんです。

本江　日本では見られない色かもしれない。

入江　17歳のとき女子美に入学するために初めて日本に引き揚げて来た時には、風景が緑の箱庭のようで驚きました。本当に美しい国だと思いました。

本江　大邱の色の印象とは？

入江　土の黄土色ですね。あとは太陽。遮るものなく直接大地を照らしていました。

本江　女子美を卒業したあと、丸善に就職

されていますね。よく入れましたね。

入江　はい。女子美にいる間は、学費を出してくれた母に報いようと必死で描いていました。日本の景色が好きなので、伊豆や大島をまわって椿の並木路を描いたり、農道の石仏に親しみを感じて全国の石仏を描いたりしていました。そして女子美を卒業したら、家族のいる大邱に戻ったんです。すると山田新一さんが京城（ソウル）の丸善を紹介してくれて、入れてくださったんです。

本江　ここでも山田さんが登場するわけですね。

入江　ソウルに一年くらい勤めた頃、支店長が私に「あなたはこんなところにいる人ではないから」と、今度は東京の本社に推薦してくださいました。東京の丸善では、ショーウィンドウのデザインをしていました。

本江　そういうことだったんですか。普通だったら本社のショーウィンドウなんか、なかなか担当させてもらえないでしょうね。

入江　はい。すると今度は丸善の方が、独立展に出品しているならば独立の野口弥太郎と林武が丸善に関わっているから指導を受けた方がいいといって、林先生を紹介してくれたんです。

本江　なるほどここで林武さんに繋がった。

入江　私は決して、望んだことはありません。絵描きになりたいとか、絵を売りたいとか、そんなことじゃないんです。いい絵を描きたい、いつもただそれだけなんです。

ハルビンへの個展旅行

本江　大邱はいまでもソウルに次ぐ美術の街で、ギャラリーもたくさんありますね。昔もそうですか？

入江　当時も盛んでした。朝鮮の郷土を描いて、後に巨匠になった李仁星（イ・インソン）さんも大邱から日本の帝展に出品されていました。白神壽吉という先生が私を李さんと引き合わせてくださいました。李さんは、後に白神さんの援助で日本に留学もされました。私も白神先生に薦められて、ハルビンへ行くことになりました。

本江　その白神という人物も、キーパーソンですね。

入江　女子美を卒業して大邱に帰ってきたとき、白神先生が「ハルビン、チチハルというところに私の知り合いがいる。お前は元気だから、そこへ行って展覧会をしてきなさい」というんです。相手の名刺を一枚渡されて。白神さんの奥さんは、行けっていう方もどうかしてるけど、行くっていう人もどうかしてるって呆れてましたね。

本江　一人でですか？

入江　はい。大冒険でした。作品を抱えて一人で列車に乗っていきました。もうこの辺かな、と思ったところで人に尋ねたら、「大変だ。次の駅で降りないとロシアに行ってしまうよ」と言うんです。大慌てで下車して真っ暗闇の中にポツンといたら、一人だけ日本人がいた。名刺を見せてこの人に会いたいというと、なんとその方が私の

いい絵を描きたいという入江さんの一生懸命さに、人は手を差し伸べたくなるんですよ。

——本江

Motoe86.indd 74-75　15/05/11 16:06

荷物をもってその偉い人のところまで連れて行ってくれたんです。

本江 展覧会はどこで？

入江 龍江ホテルというんですが、後に引揚者の拠点になった大きなホテルです。そこの大広間で個展をさせてもらいました。もっていった絵は全部売れました。お別れのときには「今度は、もっと成長して来なさいよ」と言ってくださったことを覚えています。その近くに嫩江（ノンコウ）という川があるんですけど、そこで見た風景が凄く印象に残っています。一木一草もない大陸の草原に川が流れていて、ジャンク船が一艘浮かぶ。それを真っ赤な夕陽が照らしていました。そのときはカメラもないし、スケッチしようとも思わなかったけど、強く印象に残っていたんです。

シルクロード〜色彩を求めた旅

本江 シルクロードを旅するきっかけは何だったのでしょう。

入江 戦後、山口県に引き揚げました。新制中学校で美術の先生をしていたんですが、女流画家協会が設立されると聞いて上京し、大森の中学校で絵の教師をしながら出品しました。安野光雅さんも中学校で先生をされていましたね。その頃の教え子に、台湾出身者がいて、台湾に呼んでくれたことがありました。台湾では日本と違う色彩の石仏に出会いました。それが面白くなって東南アジアや敦煌、パキスタンと石仏を追っているうちにシルクロードを旅していました。中国には国交回復した後に行きました。新疆ウイグル自治区のトルファンに行ったときには、瀬戸内寂聴さんと編集者のグループも来られていましたね。

本江 そのなかのひとつ《トルファン祭りの日》は入江さんの代表作ですね。

入江 はい。あれが最初に描いた２００号です。20号の水彩で仕上げておいて、それを大きく伸ばしました。当時はあまりに大きすぎて、半分くらいならいいのにと思っていましたが、今となっては代表作です。

本江 以前からお聞きしたかったんですが、スケッチと本画では構図がかなり違っていますね。完成するまでの間に頭の中でいろんなものを集めてきて、やり直しているということでしょうか。

入江 そうです。スケッチは現地の臨場感を残すために描いています。本画では構図を考えたり、奥行きを考えたりします。そして祭りの音楽が聞こえてくるような画面にしたかったんです。

本江 本当に、音楽的な画面ですね。

トルファン祭りの日 200Ｆ 油彩 1981年

入江 カセットテープに祭りの音を録音しておいて、あとでそれを聞きながら描いています。するとその色彩も自然と目の前に浮かびあがってきます。どこの国でも鮮やかな色が印象に残っていますね。中国の奥地にいけばバザールや祭りで見られる民族衣裳のとりどりの色があり、インドにいけばインドの、イエメンにいけばイエメンの民族の鮮やかな色がありました。そしてイスタンブールで朝焼けを見たときに色と光に包まれる体験をしました。それは若いとき、チチハルの嫩江で見た夕焼けと同じ、燃えるような太陽でした。

本江 そういえば入江さんは「私は生まれつき色の才能がある」とはっきりおっしゃっています。私も色の感覚が鋭い人が画家になるんだろうと思いますね。また98歳になって、ようやく絵が分かってきたともおっしゃってますね。

入江 描きたいと思うことが、いくらでも描けるようになってきたんです。

本江 私は普段、多摩美術大学で教えているんですが、木曜の2時限は女子美術大学の大学院生を教えています。今日がその日だったので、入江さんのことを話してきたところです。入江さんは「何も望んでいない、絵描きになりたいと思ったこともない」という。ところがいま絵描きになっている。重要なことは何だか分かるかね？って。何年かかっても、とにかく一生懸命やりなさい。そうすれば必ず誰かが助けてくれて道が開けるから、と。

入江 いろんな方が気の毒だと思って助けてくださったんでしょうね。

本江 きっとその無欲さが大事なんだと思います。今日は入江さんについて新しい事実がたくさん聞けました。ありがとうございました。

「日韓近代美術家のまなざし―『朝鮮』で描く」会場、入江作品の前で。
左に《沼地風景》（1938年）右は《洗濯》（1940年 韮崎大村美術館所蔵）

対談を終えて
本江邦夫の「今日のホンネ」

「対談」の次の日のことだ。週に一度は銀座の画廊を巡るようにしている私は、いつものように京橋駅から地上に出て四丁目の方に歩き始めた。ギャラリームサシは昔ながらのサロン風の画廊だ。素早く見て出るのも失礼なので、立派なショーウィンドウを前に入るか入るまいか思案する。色のバランスのとてもよい、なかなか気持ちのよい花の絵だ。作者の前原瑠美子さんは存じ上げないけれども……そのときだ、お店の若い人が飛び出してきて「いま入江先生がいらっしゃっています」とほとんど叫ばんばかりだ。そんな馬鹿な！昨日、葉山でお話したばかりだよ。百歳になろうという画家だもの、今日は静養に決まっている……でも本当に御本人がお弟子さんたちに囲まれて、ちょこんとソファーに座り、にこにこしていらしたのである。そこでなんだ、なんだの大騒ぎ―入江さんのお帰りのタクシーまで私が止めて、ちょっと忘れられない一日となった。なんと素敵な贈り物！「芸術の神様」も粋なことをしてくださる！

日韓近代美術家のまなざし
―『朝鮮』で描く

［今後の巡回先］

新潟県立万代島美術館
開催中〜6月28日（日）
岐阜県美術館
7月9日（木）〜8月23日（日）
北海道立近代美術館
9月1日（火）〜10月12日（月・祝）
都城市立美術館
10月23日（金）〜12月6日（日）
福岡アジア美術館
12月17日（木）〜2016年2月2日（火）

いりえ・かずこ　1916年生まれ。韓国・大邱で少女時代を過ごす。38年女子美術専門学校師範学科西洋画部（現・女子美術大学）卒業。洋画家・林武に師事。47年女流画家協会創立会員。57年独立美術協会会員。69年東南アジア・ヨーロッパ・シルクロード写生旅行。2000年入江一子シルクロード記念館（東京・杉並区阿佐ヶ谷）オープン。09年入江一子個展「シルクロード色彩自在」（日本ギャラリー／ニューヨーク）開催。現在、独立美術協会会員。女流画家協会委員。13年「女子美栄誉賞」受賞。

もとえ・くにお　1948年愛媛県生まれ。76年東京大学大学院修了後、東京国立近代美術館に勤務。96年より多摩美術大学教授。近著に『絵画の行方』『オディロン・ルドン』『現代日本絵画』ほか。

Motoe86.indd 76-77 15/05/11 16:06